

プロローグ

鈍い衝撃を背中に受け、ヘンリーは目覚めた。

途端にひどい頭痛に襲われ、うめき声をあげた。

「つつつ」

顔をしかめながら、瞼を開いてみた。

眼には何も映らない。

周囲には漆黒の闇が広がっている。

絶え間なく左右の耳を打つ、ゴーツという騒音。

——どこだ、ここは？

そう思つて身を起こそうとした瞬間、バランスが崩れ、彼を取り巻く流れに危うく飲み込まれそうになった。あわてて伸ばした腕が何かをつかみ、どうにか体勢を立て直すことができた。

——“流れ”？

暗がりの中に目を透かしてみても、やはり何も見えな
い。

彼は両足と左手で体を支えると、おそるおそる右手を伸ばしてみた。驚いたことに、ザザツとさざ波を蹴立てる音と共に、手のひらが弾き飛ばされたではないか。

水流に取り囲まれている！

彼の胸から下は水に浸かっていて、まるで船の舳先へさきのように、背中の方向から流れてくる水の圧力によって、何かに押し付けられていた。

——何なんだここは。

——地獄にでも堕ちたのか？

——それともまだ夢を見ているのか？

——どうして何も見えないんだ、眼がイカれちゃったのか！

彼が極度のパニックに襲われた、そのとき——。

雲のあいだから月が顔を出した。

舞台は黄色いライトで照らされ、周囲の景色が光の中に燦然さんぜんと浮かび上がった。

川のだ真ん中。

それが彼のいる場所だった。

背後から押し寄せる水流は、彼の背中を洗いながら脇をすり抜け、前方へとうとうと去っていく。

川幅は七、八十メートルほどか。月の光をバツクに浮かび上がる左岸には、繁茂する植物が風に揺れているのが見てとれた。

彼が両手で抱きしめていたのは、大振りの樹の幹だっ

た。樹は水の中から垂直にそそり立っている。

彼は右岸を見ようとして、ぎよつと息を飲んだ。彼がつかまっているのと同じような木が、何本も川の上にグロテスクな格好で突き立っていた。

水の流れに翻弄される木々は、さながら悪魔の使者たちがせせら笑っているようにも見え、彼は思わず身震いした。

「なんだ、ここは……」

うめくように呟きが漏れたが、急流の奏でる轟音にかき消された。

ねつとりと生ぬるい空気が鼻腔に侵入してくる。

異常な湿度の高さが、ともすれば思考を混乱に導こうとする。

いかん……いかん。

彼は冷静さを取り戻すべく、頭痛の去らない頭を軽く左右に振った。

——思い出してみよう。何があつたのか。

まずは記憶のチェックだ。まさか頭を打って記憶喪失になったわけではあるまい。

自分は——そうだ、船に乗っていた。

川をさかのぼる定期便に乗船していたのだ。

さほど大きくない木造船。

時刻は昼下がり、船長が軽いパーティーのつもりで、乗客たちに一杯ずつ酒を振る舞った。

非常に美味だったのを覚えている。お代わりがほしかったくらいだ。確か午後二時を回った頃だったろうか。だが船長の心づくしは裏目に出たのだ。我慢できない船員たちが、船長の目を盗んでこっそり飲んでいるのを目撃した。意見するのも何だから、見て見ぬ振りをしていたのだが、彼らは酔い潰れてしまったようだ。

最近の異常気象は、このあたりにとてつもない量の雨を降らせたのだという。そのため川の水かさが増えて、森が流されたり、新たな川ができたりという事態が例年以上に発生していたらしい。

船で川を行くのに、最悪の時期だったといえる。だが自分にとっては初めての土地だったし、そんな危険が潜んでいようとは、予想だにしていなかった。

太陽がかなり傾いた頃、大きな衝撃があり、船は暗礁に乗り上げた。水没した樹木に引っかかったのかもしれない。見張り役の船員が、肝心の時に酔って使いものにならなかったせいだ。

船体はいとも簡単にひっくり返った。デッキで涼んでいた乗客たちは次々と川に叩き落とされた。

私は椅子から転げ落ちたが、かろうじて転落をまぬがれて……。

待てよ。

船が傾く前、私は誰かと会話を交わしていた。

非常に重要な会話を――。

脇腹に殴られたような鈍痛が走った。

顔をしかめながら水面を見ると、四角いものが月明かりを鈍く照り返しながら流れていった。

見覚えがある。定期船のデッキチェアだ。

そうか、転覆した船の落下物が流されているのだ。

デッキチェア程度でもこの流れに乗れば、凶器になる。げんに脇腹はまだジンジンしている。

思い出した。目を覚ましたときも背中に衝撃を感じたが、あれも荷物か何かがぶつかったのに違いない。

これからも何が流れてくるか判ったもんじゃないぞ。

物によつては、樹から振り落とされる恐れがある。

今や“命綱”とも言えるこの樹。直径わずか三十センチほどだ。見上げると月の光に照り映える雲が、その部分だけ茂った葉によつて黒く切り取られている。その手前に二股に分かれた幹が見える。決して大きな樹木ではないが、あそこまで登れば水に浸からなくて済みそうだ。彼は突き出ている枝に手足を掛けながら、氣力を振り

絞って登っていった。

うつすらと空を染める曙色が、瞼のあいだを通して、彼の眼を刺激した。

いつの間にか、眠りに落ちたらしい。こんな極限状況にいるというのに。

刻々と高度を上げる太陽は、彼を取り巻く絶望的な状況を容赦なく照らし出した。

夜目に見た以上に、川の両岸は遠い。

大声を張り上げれば届きそうな距離ではあるが、間に横たわる河はとてつもない急流で、泳ぎ渡ることなど到底不可能だ。

助けを呼ぼうにも、岸边ははみ出さんばかりに茂ったジャングルであり、誰かが通りかかるなんて見込み薄だ。目を転じる。

月の下では悪魔の使者にも見えた水上の木々が、太陽の下では、大蛇のごとき濁流のうねりに必死に耐える、ひ弱な存在にしか見えなかった。

彼の目が、木々と水面が接する部分に吸い寄せられた。あちこちにさまざまなものが引っかかっている。

船の積荷、浮き輪、樽。誰かの野球帽もある。

そして……人だ。

屍体が目に入ったとたん、彼は吐いた。

あれだけの事故だ。予想はしていたものの、やはり衝撃的だった。

数えたくはないが、気づいただけでも五体はある。

——助かったのは自分だけなのだろうか。

絶望感と疲れが肩にのしかかる。

彼は我が目を疑った。

屍体と思っていたひとつが動いたのだ。生きている。

距離は五、六メートルぐらいだ。

「おーい！」

彼は水音に負けない大声で叫んだ。

「おーい、こっちだ！」

呼びかけられた男は、その白髪頭を上げた。

男の顔がこちらを向いた瞬間、世界がグルグルと回転を始めた。

最後まで隠れていた激情の記憶が呼び覚まされ、すべてのパズルが置かれるべき場所に収まった。

その男こそ——。

ヘンリーを苦しめ、彼から肉親を奪った男。

どんなに憎んでも余りある、この世で最も許すことのできない男。

「……ハンス……ハンスか？」

男は苦しい声で、ヘンリーのもうひとつの名前を呼んだ。

「社長！」

ヘンリーにとって憎しみの権化ともいうべき男。しかし口について出た言葉は、呼び慣れた男の肩書きだった。くそつ、いまさら。

そうだ、いまさら何をためらう。

思い出してもみろ。

彼のために狂わされた、自分の人生を！

彼によって命を奪われた肉親の顔を！

いま、広大な自然の中、ヘンリーと男のたった二人。

ついに待ち望んだ状況が与えられたのだ。

いまこそ積年の恨みを晴らし、復讐を遂げなくてどうするというのだ。

ヘンリーは腰にまわしたポーチに手をあてた。そこにはこの地に来てから入手したある道具が、醜悪な重量感を伴って忍び隠されていた。

「社長——いや、ノーマン・グリーンウッド！」

ノーマンと呼ばれた男は、フルネームで呼ばれたことに不審を感じたらしく、濡れそぼってパリパリに乾いた眉をしかめた。

その時だった。

突然、激しい雨が二人の周囲に降り注いだ。
いつの間にか雨雲が空を覆っていたらしい。

絨毯爆撃さながらの雨足は激しく川面を打ちつける。

「ノーマン！」

頭上を覆う葉の間を貫いて、頭や両肩に雨粒が落ちてきた。目を開けていることさえ難しい状況で、それでもヘンリーは何度も男の名を呼んだ。

だが視界は見る見る悪化し、もはや目と鼻の先にあるものさえ判然としない。

——またか！

ヘンリーは舌打ちした。なぜだ。なぜいつも男を追いつめたと確信した時に、決まって邪魔が入るのだ？

彼は神を呪った。

神など信じてはいなかったが、呪わずにいられなかった。

そして天にいる肉親に祈った。

——せめて、せめてあの男がこの雨に、この激流に押し流されたりしませんように！　お願いです！

彼が転覆直前まで対峙していた男。

自分は何年ものあいだ、ひたすらあの男を追いつめてきた。そして苦労を重ねた末、ようやくこの地まで、奴を追いつめることができた。

このアマゾンの奥地まで――。

第一章 ロンドン

ヘンリー・マクファアソンはイギリスに生まれた。

住んでいた家はロンドンの下町は裏通りに面した場所にあった。そこは、どんよりとした天気が多いロンドンでもとりわけじめじめした空気の澱む場所として悪名高く、近代化に乗り遅れた区画として市民の槍玉に挙げられるのが常だった。

住んでいるのは低所得者層の人間ばかりで、中には流れる外国人や素性の知れない連中もいた。しかし定着するのはおおむね人の好い者が多く、それなりの住み心地の良さと賑やかさを呈していた。

この街の一角に住むマクファアソン家もご多分に漏れず、暮らしは貧しく慎ましかった。労働者階級の父親は帰宅する前から床につくまで酒瓶を手放さない男で、始終陰気な声でぶつぶつ文句を言うのが癖だった。それでも低賃金の仕事を休まない真面目さだけは持ち合わせていた。

母親は対照的に豪快な笑い声が自慢の恰幅のよい女だった。彼女はヘンリーが物心つく前から、狭い台所の隅に工場から安く払い下げられたミシンを置き、洋服などの仕立て直して小銭を稼いできた。母親は物事に拘こたわらない性格だったが、仕事は繊細と言っているほどの丁寧

さを誇り、優しい気遣いがそこに現れていた。いつしか母親の見事な仕事ぶりは人づてで広まり、街中で母親の手が触れない服を着る者など一人もいない、着ている服の縫い目を見れば、余所者か街の住民か判るとまで言われた。

ヘンリーにはメアリーという姉がいた。彼女は母親譲りの器用な手先をしていたので、母親が疲れた時など交代してミシンを踏んだ。それ以外は家事全般が彼女の担当だった。なかでも食事には彼女の才能がいかなく発揮され、特にスープの絶妙な味は隣近所からも分けてほしいと声がかかるほどだった。もちろんヘンリーのお気に入りメニューであったことは言うまでもない。

メアリーは線の細い人だったが、幼い頃から近所でも評判の器量よしで利発な娘だった。家事に追われて学校に通うことが殆どなかったにも関わらず、いつしか読書家になっていた。もちろん本を買う余裕などなく、古本屋で擦り切れて破棄寸前という本を譲り受けてくるのだ。メアリーが好んで手に取るのは画集や美術評論に関するものだった。ヘンリーは眠りにつく前に姉から本の話聞くのが楽しみのひとつだった。

ヘンリーはそんな家族の中ですくすくと育った。家族

の意向で、彼だけは学業を優先することを許された。その代わり下校後はフル回転で母や姉の手伝いをした。彼に割り当てられた仕事は、母親の仕立て直した服を配達したり、注文を受けたりというものだった。おかげで彼の頭の中には街の地図が正確に記録されていた。そして時間に余裕のある時など、わざと通ったことのない道に回ったりして、珍しい建物や風景を脳裏に刻み込んだ。

ヘンリーの隠れた才能にいち早く気づいたのは姉だった。彼女はヘンリーが絵を描いているのを知っていた。質の悪い包装紙に描かれた街の風景画や緻密に描かれた地図、友達の肖像画を目にしたとき、その素晴らしい出来映えに驚嘆した。

「この子は美術学校に行かせるべきよ！」

夕食の席で父母を前にして、姉はそう叫んだ。

父親はいつものぶっきらぼうな物言いで酒量を減らすかと言っただけだし、母親は子供の将来のためならもつと稼がなきゃと双手を挙げて賛成した。

そんな温かい後押しがあつて、ヘンリーは小中学校を滞りなく卒業すると、美術学校の入学試験を優秀な成績でパスした。

ヘンリーは心から家族に感謝した。これからは堂々と胸を張って好きな絵を描くことができるのだ。そう思う

と、寄宿舎での慣れない生活も都会の喧噪も、すべてが創作への刺激に思えた。

ヘンリーは毎日、ひたすら描いた。

友人たちが都会の誘惑に負けて遊興に耽っている時でも、彼は寸暇を惜しんで描き、新しい技術をどんどん身につけていった。

休日には市内の美術館や大英博物館などに足を運び、自分の感性を磨くことにも余念がなかった。卒業したら職業画家かイラストレータとして身を立てて、一日も早く家族の生計の一端を担おうという意気込みを胸に秘めて。

しかし、そんなささやかな夢も、ある日突然打ち砕かれてしまった。

「父さんと母さんが？」

ヘンリーは自分の耳を疑った。実家の隣に住む顔なじみのおばさんが電話口で彼に伝えた事態を、すぐに受け入れることができなかった。

“父さん、母さんが瓦礫の下敷きになった”。

“生き埋めになったまま、まだ見つかっていない”。

……そんなバカな話があるもんか！

ヘンリーは受話器を戻すのも忘れ、転がるように寄宿舎を飛び出した。まだ朝の八時過ぎ。ストリートは仕事

先へ向かうサラリーマン達でいっぱいだった。ヘンリーは彼らの肩を突き飛ばすようにして駆け出した。最寄りの地下鉄の階段を下りると、切符を買うのももどかしく、やってきた電車に飛び乗った。

——いったい何があったんだ？

ヘンリーはこの朝、学校には寄らずに、とある小さな美術館に直行する予定だった。

美術学校に入学してもうすぐ一年が過ぎようとしている。先日彼は自信作のある展覧会に出品したが、何とそれが金賞に選ばれたと連絡があったのが三日前。今日は授賞式を行うというので出席することになっていた。

ヘンリーは天にも昇らんばかりに喜んだ。きつと両親や姉も喜んでくれるに違いない。賞状と記念品をもらったらいきなり実家に現れて家族を驚かせてやろう。それが今自分にできるささやかな親孝行だ。

正装に身を包みながら、そんなことを考えていたのに。

「なんてことだ……」

無惨に崩れ落ちた我が家を前にして、ヘンリーは焦点の定まらない目をあちこちにさまよわせた。

瓦礫の上ではヘルメットをかぶった作業員達が、注意深く歩きながら、両親の名前を呼んでいる。

連絡をくれた隣家の夫人が、両手に顔をうずめながら

語ったところによると、こうだ。

市の再開発計画はとうとうこの辺りまで押し寄せ、住民は早期退去を迫られていた。この地区を鬼子扱いする風潮は以前からあったが、今回の計画は突然降って湧いたという。なにしろわずか一ヶ月で立ち退けというのである。当然住民側は拒絶し、反対運動を巻き起こした。運動の先頭に立ったのはなんとヘンリーの母親である。彼女は多数の住民を誘って、毎日、市庁舎へ陳情に出かけたという。そんな間も、父親と姉にはしっかり仕事をさせていたというから彼女らしい。

悲劇は今朝、起こった。

立ち退き期限までまだ一週間あるのに、大きな鉄球をぶら下げたクレーン車が街に乗り込んできたのである。

春まだ遠い二月の早朝。どの家からも朝餉あさげの煙が棚引いていた時間帯、クレーン車は迷うことなくマクファーソン家を目指して直進したという。

所定の位置に着いたクレーン車から発せられた「今すぐ家から出るように」との呼びかけは、たった一度だけだった。母親は転がるように玄関から飛び出してきた。

折悪しくこの日、父親は風邪気味で伏せていたという。だから今すぐ家を出るのは無理だとクレーン車を操る責任者に訴えたが、責任者は聞く耳を持たず、鉄球の鎖を振り回し始めた。

第一撃は狙いを過たずに正面の壁を突き崩した。母親は悲鳴を上げて、舞い上がる粉塵の中、家に飛び込んで行ったという。近隣の誰も止めることができなかった。もともと体力に勝る母親を止められる者は、およそこの街にはいなかっただろう。

「……あつという間だったの。お母さんが駆け戻ったことに気づいた人も少なかったでしょう」

夫人はそう言ったが、ヘンリーは信じなかった。市の連中は知っていて故意にやったんだ！

そこまで考えてハツとした。

「姉さん、姉さんはどこですか？」

夫人は知らないという。しかし早朝なら姉さんも家にいたはずだ。

「いたぞー」

ヘルメットの一人がヘンリーの不安に応えるように声を挙げた。それは両親の寝室があった場所だった。

周囲の制止を振り切って、瓦礫の上に這い上がったヘンリーの目に飛び込んできたのは、既にこの世の人ではなくなった両親の遺体だった。二人の顔が無傷だったのが、わずかな救いだった。

続いて、寝室に通じる廊下に倒れていた姉が発見された。彼女には息があった。腰から下が太い柱の下敷きに

なっていて救出に時間を要したが、すぐに病院へ搬送された。

収容が後回しになった両親に後ろ髪をひかれながらも、ヘンリーは姉に付き添って病院へと向かった。

大手術の末、姉は一命を取り留めた。

「父さんは前の晩からひどい風邪で動けなかったの。背負おうと思ったんだけど私には無理だった。困ってたら母さんが戻って来た。その時なの、壁が倒れてきたのは。母さんは私を突き飛ばした。そのお陰で助かったのよ」
しかし、彼女は二度と歩けない体になった。

姉を車椅子に乗せて帰ってみると、住み慣れた街はすっかり更地になっていた。

『グリーンウッド百貨店 建設予定地』

高々と立てられた看板にはそう書かれていた。

風通しのよくなった空間には、懐かしいじめじめ感は微塵もなかった。ただ家々のあつた所に残る土台の跡がむなしく名残を止めているだけだった。

「……………」

無言でたたずむ二人。

その後ろに黒のロールスロイスがスーツと停車した。
ヘンリーが振り返ると、扉が開き、黒いスーツに身を固

めた二人の男がボディガードを従えて降りてきた。

「すっかり片付いたじゃないか。おまえの水際だった手並みには毎度驚かされるばかりだなあ」

大げさに両腕をひろげた細身の男には見覚えがあった。イアン・グリーンウッド。流通業界の大物だ。大仰に伸ばした髭、ギョロリとした大きな眼、こけた頬に尖った顎。白髪の下で不遜な表情を醸し出すそれら造作の集合体は、何度か寄宿舎の新聞紙上でお目にかかった。

「有効利用が我が社のモットーですからね。金も土地も人間も」

そう応えた若者こそ誰あろう。

ノーマン・グリーンウッド。

イアンの息子にして流通業界の若きプリンス。その優雅な身のこなしや、衣、食、絵画など多岐にわたる分野で趣味の良さを誇る彼を人は「貴公子」と呼ぶ。

「今回も荒っぽい手を使つたんだろう？」

「いえ、蜂の巣駆除にくらべれば、たやすいことでしたよ」

ヘンリーは、目の前にいる二人の男こそが、我が街を破壊した張本人であることを理解した。

こいつらが！ こいつらが父さんと母さんを！ そして姉さんの足を！

頭に血が昇ったヘンリーが怒鳴ろうとした瞬間、手の

中にあった車椅子のハンドルグリップが消えた。

姉は自らの手で車輪を回し、グリーンウッド親子の前に立ちふさがった。

「人殺し！」

彼女は身を乗り出して叫んだ。

グリーンウッド親子の後ろに付き従っていた二人のボデイガードが、すかさず親子の前に出ようとした。イアンはそれを手で制した。

いきなり声をかけられて度肝を抜かれたようだったが、イアンはすぐに微笑を浮かべると、

「これは美しいお嬢さん、ここはお嬢さんのような方が来る場所ではありませんよ」

「余計なお世話よ！　ここは私達の故郷なんだから」

「——おやおや初対面の相手に掛ける言葉にしては、あまり上品ではありませんね」

そう言って近づいてきたのはノーマンだった。彼は車椅子の後ろに回るとハンドルグリップを握って、車椅子を反転させた。

「離して、汚らわしい！　父さんと母さんを殺めた手で触らないで！」

いつもは温厚な姉が、目尻を吊り上げてグリーンウッド親子に食ってかかる。ヘンリーも負けじとノーマンの手からグリップを奪い返した。

ノーマンはお手上げをするようなおどけた仕草で後退した。

「失礼、出過ぎた真似をしました。——だがご両親を殺めたとは心外ですな」

「本当のことじゃないか！」ヘンリーもようやくのことで言い返した。「父さんと母さんを返せ！」

「やれやれ、困った人たちだ」

ノーマンは肩をそびやかして父親のイアンを振り返った。

「君たち、勘違いをしているようだね」

ノーマンは微笑みを浮かべながら、話しかけた。

「勘違いだと？」

ヘンリーは一步前に出た。

「そうだよ。この街から立ち退いていただくのに、死者なんて一人も出ていないよ」

「何だと……僕たちの父さん母さんは壊された家の下敷きになって死んだんだぞ」

「それが勘違いだと言うんだよ。運び込まれた病院に問い合わせてみたまえ。ちゃんと生きておられるから」

「そんなバカな……」

ヘンリーは呆然として姉と顔を見合わせた。

「バカなのは君たちだ。いきなり人をつかまえて人殺し呼ばわりするとはな」

「ノーマン、仕方がなからう。これだけ大きな地区の住民が一齐に移動したんだ。情報が一つや二つ錯綜したところで不思議ではない」

訳知り顔で締めくくったイアンは、ここにはもう用はないとばかりにノーマンを車へ促すと、あつという間に街の中心へと消えていった。

ヘンリーと彼の姉は、混乱した頭のまま、病院へと向かった。姉が入院していた病室の担当ナースを見つけ、当局に問い合わせてもらうと、意外な返事が返ってきた。「ええ、マクファアソンさん御夫婦が担ぎ込まれた時は、危篤状態でした。数時間の手術の後、なんとか持ち直されたので、数日後に他の病院へ転院されたそうですよ」二人は再び耳を疑った。そんな話はもちろん初耳だ。念のために転院先を聞き、夢を見ているような気持ちで行ってみたが、教えられた場所に該当する病院など存在しなかった。

消されたのだ。

立ち退き反対の急先鋒だった両親を、文字通り抹殺することは、街全体に対する見せしめだったのだ。

気づいた時は、すでに遅かった。

ヘンリーは市庁舎に乗り込んで訴えたが「君たちの方から自発的に退去したのだらう。そう聞いておる。後は

マクファアソンにまかせたのだ。我々は関知しとらん」
とにべもない返事が返ってきた。

ヘンリーは怒りに燃えた。それならば目撃者を集める
しかない。ヘンリーは、彼ら同様に家を失った隣人たち
を探して回った。

しかしそこでもヘンリーを待っていたのは信じられな
い反応だった。かつての隣人たちは、

「俺たちは早くあの街を出たかったんだ。おまえの母親
がよけいなことをしなけりや……クレーン？ 鉄球？
何のことだ？」

誰もが似たような言葉をヘンリーに浴びせた。

あの日、両親の急を知らせてくれた隣家の夫人でさえ、
証言することを拒否した。だがヘンリーの説得に根負け
してようやく開いた口からは想像を絶する言葉が飛び出
した。

「ごめんなさいね。私たちみんなお金をたくさんもらっ
たの。何もしゃべるな、何もなかったことにしろって」
ヘンリーは涙を飲んで引き下がるしかなかった。その
夜、彼は姉の動かぬ膝に顔をうずめて泣いた。姉も弟の
髪をなで、いっしょに泣く以外になすすべがなかった。

ヘンリーは学校を辞めた。未払い分の姉の治療費を工
面しなければならなかったし、なにより当面の生活費が

なかったのだ。学校側は奨学金の供与を勧めてくれたが、必要とする額にはほど遠く、すっぱりとあきらめた。

ヘンリーと姉は、酒場街の裏に部屋を借りて、ささやかな生活を始めた。ヘンリーは朝から深夜まで身を粉にして働いた。姉もそんな弟を支えるために、懇意になつた向かいのバーのマダムから電動ミシンを譲ってもらい、仕立て直しの仕事を再開した。

日々の忙しさや、たまつていく疲労感からつい心がくじけそうになったが、二人は互いに励まし合つて、父母の汚名をどうやってそそぐかを毎晩話し合つた。

両親の遺体、遺骨は依然行方不明のままなのだ。しかし彼らには探し出す手だてがなかった。

ヘンリーは仕事の合間を見つけては、スコットランドヤードスコットランドヤードに出向き、話を聞いてくれる刑事を捜した。門前払いされることもしばしばだったが、彼は根気よく日参した。

ある日の昼下がり、いつものようにがつくり肩を落として警視庁ヤードを後にしたヘンリーは、後ろから声をかけられた。振り返ると灰色のトレンチコートに身を包んだ男が小走りに近寄ってくる。目つきの鋭い長身の若い男はメイスンと名乗り、電話番号をしていたらたつたいまゝマクファーンソンと縫い取りのある上着を着た遺体が発見されたという連絡があつたとヘンリーに告げた。

メイスンはこれから現場に向かうが、今なら車に同乗させてやろうと言ってくれた。ヘンリーは姉に連絡を取りたかったが、今の自宅には電話がない。あきらめてメイスンが回してきた車の後部座席に乗り込んだ。

連れてこられたのは、郊外の工場跡地だった。むき出しになった鉄骨に浮いたさびが、工場が使われなくなつて久しいことを物語っていた。

「父の……遺体はどこですか？」

車が止まると同時に飛び出したヘンリーは、あたりの異様な静けさにとまどいながらメイスンに問いかけた。

「こちらですよ」

その声には異様な響きがこもっていた。不審に思つて振り返ろうとしたヘンリーは、後頭部に激しい痛みを感じると、そのまま意識を失った。

ここは……？

ヘンリーは暗闇の中で目を開いた。と同時に激しい嘔吐感に見舞われた。しばらくのたうち回ったあと、彼は自分がだまされておびき出され、この場所に捨てられたのだと悟った。

甘かった。奴らはヘンリーの動向から目を離してはいなかったのだ。ヤードで真実を訴えようとするヘンリー

はひどく厄介な存在だったのだ。

おそらくメイスンと名乗った男は刑事ではない。いま考えれば一人で出てきたのも怪しいし、車も警察車らしくなかった。

ヘンリーはごつごつした廃材の上に起き上がった。まだ後頭部がじんと痛む。体の至るところが悲鳴をあげている。

見上げるとはるか上に工場の天井があり、その手前に穴の縁が丸く見えた。彼は深い穴の底にいたのだ。うっすらと赤く染まって見えるのは、夕暮れが近づいている証拠だ。

目を足下に転じると、大きな緩衝材が横たわっていた。ああこれが落下の衝撃を和らげてくれたんだ。ヘンリーは幸運を神に感謝した。

急ごう。こんなところで夜を過ごすわけにはいかない。姉さんが心配する。

さいわい、即席の梯子はしごを作るのに材料は事欠かなかった。長い木組みに、拾った木切れや鉄骨の破片をひもでくくりつけ、側壁に立てかけた。登りきるには短かったが、三度目のジャンプでどうにか穴の縁に手が届いた。

工場の床面に身を横たえたとき、陽はすでに暮れていた。息が整うのを待って彼は暗い工場を後にした。

明かりはどこにもなく、人の気配はさらになかった。

時たま雲間から顔をのぞかせる月の明かりは、周囲に点在する廃墟を、まるで墓石のように浮かび上がらせるばかりだった。天文マニアなら月の位置から方向ぐらい割り出せるんだろうが。

これでは右も左も判らない。いや北も南も、だ。

そのとき夜空を移動する光を発見した。飛行機だ。どうやら着陸モードらしい。彼は光を目で追いながら頭の中で地図を広げた。

判った、あっちだ！ 叫ぶと同時にヘンリーは駆け出していた。

負けるもんか。奴らの思いどおりにはさせないぞ。
夜のアスファルトの上で、足音だけがこだました。

一番列車が動き出す頃、地下鉄の駅を見つけ、泥のよう
に疲れた体を、客のまばらな車両の座席に横たえた。
地獄からの生還だ。彼は仲睦まじい家族の写真の載った
車内ポスターをながめながらつぶやいた。

しかし本当の地獄はこれからだった。

たどりついた一部屋きりの我が家には姉の姿はなく、
走り書きのメモが一枚、テーブルに乘せられていた。

“母さんが見つかったと連絡があったので、刑事さんについていきます”。

ヘンリーは、あつと声を上げた。

そのときノックもなく玄関のドアが開き、向かいのマダムが涙をためた目でヘンリーに怒鳴った。

「どこに行ってたのよ！ あんたの姉さんが――」

警察は、姉の死を自殺と断定した。

タワーブリッジの遊歩道から、手すりを乗り越えて、身を投げたのだと。残された車椅子の上には「疲れました。さようなら」と書いた紙切れが置かれていたのだと。

バカなバカなバカな！

気丈な姉が自殺などするわけがない。

ヘンリーには直感するまでもなく判っていた。奴らのしわざだ。両親の死の真相を暴こうとする自分たちの存在が邪魔だったのだ。

今回も数人の目撃者が証言したという。でっちあげである。周到な連中のすることだ。ヘンリーがいくら反論したところで警察は聞く耳など持たないだろう。

霊安所で対面した姉の顔はまるで眠っているようにきれいだった。ヘンリーは冷たい姉の手を握りながら涙を流した。

「姉さんはよく、この世に神様なんぞいないと言ってたね。ぼくにもようやく飲み込めたよ。確かにこの世に神様なぞいやしない。姉さんは身をもって証明してくれた。

今日からぼくは鬼になるよ。復讐の鬼に。ぼくは父さん母さん、そして姉さんの仇を討つことに生涯を懸ける。

グリーンウッドに目に物を見せてやるからね！」

姉の頸に光る銀のペンダントを、こみあげてくる怒りと悲しみに震える手で取り外した。それは崩れた実家の跡から見つけた母の遺品でもあった。

「奴らはぼくが生きていることを知れば、また襲ってくるだろう。ぼくはこれからすぐ身を隠さなくちゃならない。……さようなら姉さん。空の上からぼくを見ていてくれ」

ヘンリーは裏口から病院を抜け出すと、どこへともなく姿を消した。

半年後、岸壁から離れつつある大型貨物船の荷物の陰にヘンリーの姿があった。

これ以上、国内にとどまることは危険と判断した彼は、密航という行動に出た。行き先はニューヨーク。

この六ヶ月の間、彼は下町時代のわずかなツテを頼って逃げ続けた。行く先々に追っ手の影が出没し、ヘンリーは生きた心地がしなかった。それでも彼は必死で逃げた。時には浮浪者に身をやつし、時には下水道の奥底で一週間も息をひそめたり。

そうするうち、必然的に裏社会に精通することになり、

グリーンウッドに関する生臭い話をいくつも耳にするこ
とができた。それによれば奴らの荒業はヘンリーの街に
始まったことではないらしい。特にノーマンが経営に参
画するようになってからはヤリ口がエスカレートし、犯
罪まがいどころか犯罪さえも厭^{いと}わないという。ノーマン
によって消された人間は十人や二十人ではないらしい。

さらにヘンリーは驚くべき噂を耳にした。

奴らがそれだけの荒業をやつてのけることができるの
は、背後に巨大な組織があるからだという。そしてそれ
は従来のテロ組織やマフィアのたぐいとはまったく別次
元の組織というから、ヘンリーには想像もつかなかった。
よく考えれば、警察をあれほど簡単に翻弄できるだけ
の二セ証人を瞬時に用意できる連中だ。チンケな悪党連
中にできることではない。一体全体どのような組織なの
だろう？

半年間の逃避行の末、これ以上国内にとどまるのは危
険であると察した彼は、海外への逃亡を決断した。

――反撃する力をつけたら、いつか必ず戻ってくる。

――その時はグリーンウッド親子の頭上に、正義の鉄
槌を振り下ろしてやる。

薄暗い船倉の中、彼は頸にかけたペンダントを握ると、
静かにそうつぶやいていた。

第二章 ニューヨーク

初めて踏んだ異境の地に対する感想は、良くも悪くもスケールの大きな国、スケールの大きな街だということだった。

新しいものが生まれると人々はワッと集まるが、翌日にはまた別のものが注目を浴びる。浮ついているかと思えば、奥行きを感じさせる。

懐の深い国。それが十八歳のヘンリーが抱いた、アメリカに対する偽らざるイメージだった。

この年になるまで、ロンドンすら出たことのない彼にとって、渡米という行動は、月や火星に行くのと大差のないものだった。

ところが、いざ到着してみると、まるで故郷に帰ってきたような錯覚を起こすほど、ヘンリーにはアメリカの水がとてもよく合った。ニューヨークという街は、双手をあげて彼を歓迎してくれたのだ。

ヘンリーはハンス・マグワイアと名前を変え、積極的に街にとけ込んでいった。

新天地で最初に選んだ仕事は、百貨店の事務員の下働きだった。それは“流通王”グリーンウッドへの復讐の伏線であり、敵を知るための第一歩だった。

いざ仕事を始めると、まともな職についたことのないヘンリーに事務や経理の能力があることが明らかになった。彼はめきめきと頭角をあらわし、二年が過ぎる頃には全ての仕事を覚え込み、経理の達人として会社になくてはならない存在になっていた。

だが彼はそんな立場に安住しなかった。勤める百貨店の将来性が小さいことを見てとると、有益な顧客情報を持つて、より大きな会社に自らを売り込んだ。

多少、後ろゆびを指されることはあったが、気にしなかった。敵は巨大なのだ。義理や人情がどうのと甘いことなど言ってはられない。

最終目標は「復讐」であり、出世などそこにたどり着くための一手段でしかない。そのためなら何だってやる。他人を蹴落とすことも厭わない。法に触れることだって場合によっては、やる。

そう、彼はただグリーンウッド親子に痛手を負わせるだけでよしとしていない。グリーンウッド財閥自体の没落を狙っているのだ。肉親を奪われたことに匹敵する苦しみを奴らに与えなければ、復讐の意味はない。

彼の信念は鉄のように強固だった。美術学校時代と同じように遊興にふける時間など一切持たず、暇さえあれば勉強にいそしんだ。この社会の成り立ちを知るために、そして有効な武器を身につけるために。

渡米してから五年が過ぎる頃、ヘンリーはニューヨークで三本の指に入る大手百貨店の若き販売課長に抜擢されるまでになっていた。

誰もが彼の出世の速さに驚いた。しかしもつとも驚いていたのはハンス、いやヘンリー自身だった。これほどの才能が自分にあるとは想像もしなかった。その上、まだまだ余力があることも自覚していた。さらに腕に磨きをかけ、百二十パーセントの本領を発揮すれば、この何倍も上まで登り詰めることができる。そう確信することができた。

ある日、職場の自室でニューヨークタイムズの朝刊に目を通していたヘンリーは、コーヒーの入ったマグカップを指から落としそうになった。衝撃的な見出しが大きな活字で並んでいたのだ。

“英国流通業界の貴公子、満を持して米国に殴り込む”。下には、一日とて忘れたことのないノーマン・グリーンウツドの顔写真が掲載されていた。

彼の体はさまざまな想いで打ち震えた。

いずれ財力をつけ、広い人脈を手に入れたら、こちらからイギリスに攻め込もうと考えていたのに、敵は自ら我が陣地に踏み込んできたのだ。なんという好都合。

さらに彼を喜ばせることが記載されていた。ノーマンは米国進出の足がかりに、まずヘンリーの百貨店を吸収合併する計画をぶちあげていたのだ。

どおりで今朝は早くから重役連の車が次々と駐車場に乗り付けてきたわけだ。

ここ数年、マンハッタンに構える大型小売店はどこも不況のあおりを受けて青息吐息だった。ヘンリーの店も例外ではなく、常に身売りの話が後を絶たなかった。彼もいざというときに備えて業界の調査を怠っていなかったが、今回の事態はまさに青天の霹靂だった。

いや天の配剤というべきか。

ヘンリーは不適な笑いを頬に浮かべると、立ち上がって軽快なステップを踏んだ。

グリーンウッドのアメリカ上陸は後に、六、七十年代のベトナム戦争や公民権運動以来の超弩級台風の襲来と称された。

当初は、イギリスの一介の商売人がいかほどのものかという風潮もあったが、グリーンウッドのやり方はアメリカ人以上に自由かつ進取の気風にあふれていた。強引と言っているほどの流通機構の見直しは、老舗の他店に恐怖を与え、消費者には圧倒的な拍手と賞賛の声で迎えられた。

吸収されたヘンリーの会社では、彼の所属する部門の半数の人間がリストラの対象となり、姿を消した。

ヘンリー自身は販売部長へと昇進した。彼の年齢では驚くべきことだったが、周囲の人間は納得した。グリーンウッドはグループの隅々にまで目を光らせており、ヘンリーの異例の昇進は、ノーマンが謳う人材有効利用の証左でもあった。

ヘンリーは今やグリーンウッドの懷に飛び込んだ形になった。自分の働きがノーマンの私腹を肥やす手助けをしていると思うと、内心忸怩じくじたるものがないではない。しかし墜落する高さが高ければ高いほど破壊の衝撃は増すものだ。これもグリーンウッドを墜落させる一歩であると自分自身を納得させた。

ある日、グリーンウッドUSAの全社員を集めての社長挨拶が行われた。

ひさびさに対面するノーマン・グリーンウッドだった。ロンドンの一別以来である。

ヘンリーは二十五歳になっていた。ノーマンは三十二歳。イギリスは父親にまかせ、アメリカを一手に引き受けた彼は見違えるほどの威厳と貫禄を身につけていた。

「この国はいまも世界のフロンティアである。諸君もひ

とりひとりが最先端にいるという気概を持つてほしい。

我が社は無能な人間を必要としない。才能があれば、十歳の少年でも私の右腕に取り立てよう。私の目はどこにでもある。そのつもりで励んでほしい」

ノーマンの表情は「勝ち組」の持つ輝きに彩られていた。上り調子の人間に特有の高揚感、陶醉感、そして至福の表情といったものをうかがうことができた。

見ているがいい。

いずれその顔を恐怖と悔恨に歪ませてやろう。

這いつくばって許しを乞わせてやろう。

その日までせいぜい我が世の春を謳歌しているがいい。

ふとノーマンの眼がヘンリーの顔を捉えた。ヘンリーはギクリとした。アメリカに渡ってから年月は彼の顔付きを少年から大人に変えた。グリーンウッドに移ってからは意識的に髭を伸ばしている。まさか気づかれはしまい。だが注意するに越したことはない。

ヘンリーは視線をそらすことなく、ノーマンの顔を見返した。

仕事の虫であるヘンリーは男振りもよく、言い寄ってくる女性は後を絶たなかった。しかし一度として相手にすることはなかった。いずれグリーンウッドに反旗を翻し、ノーマンの息を止めようという身である。女性の相

手などしているわけにはいかない。それ以上に、ピリピリと神経を張りつめている彼の相手がつとまる女性など、どこにもいない。

そうは思っても、ときに孤独感に襲われることがあった。そんなときは画学生時代を思い出し、ひとりでメトロポリタン美術館や近代美術館（MOMA）などを観て歩いたりした。

ある日、MOMAで『片腕を上げて立つ裸の男』なる絵を漫然と眺めていた彼の後ろから声が掛かった。

「エゴン・シーレは好きかね？」

振り向かなくても声の主が誰なのか判った。

「私もたまにここに来ることがある」

「絵が大好きですか？」

ノーマンを前にして、ヘンリーは声が震えるのをどうすることもできなかった。

「絵がどうのというわけではない」

いつもの黒いスーツに身を包んだノーマンは、右手であご髭をしごきながらヘンリーの横に並んだ。体格だけなら二人のシルエツトはまったく同じに見えるだろう。

「今までにないものを創造しよう、時代に新たな息吹を吹き込んでやろう、そんな意気込みを包含したものであればアートであれ何であれ私は評価する。」

君もそうじゃないのかね？ ハンス・マグワイア君」

「――私をご存じなんですか？」

背中をたらりと冷や汗が流れる。

ノーマンは髭から手を離し、自分の額を指さした。

「できる人間は武器だ。私はすべての武器のデータをここに収めている」再び絵に向き直った。「君は販売部長として大変有能らしい。これまで数度、販促の提案書を提出しているね。どれもじつにすばらしい出来映えだった。どうやら君は、時代の先を見つめる眼をもっているようだ」

「あ……ありがとうございます」

「しかしまさか、ここで会えるとは思わなかったよ。こんな私だが、ときたま美術館を巡ることもある。いい刺激になるのだな」

「そうですね」

答えながら、ノーマンの足許を見つめる。彼との距離はわずか二メートル。いまなら躍りかかって頸を絞めることだって可能だ。

ふと気配を感じて振り返った。プロレスラーのような体型をした男が二人、黒服にサングラスの出で立ちでこちらを睨んでいる。見るからに美術館には不釣り合いの彼らには見覚えがあった。あの日、グリーンウッド親子に詰め寄った姉と自分の前に立ちはだかろうとした男たちだ。

「ボデイガードだ、気にするな。私には敵が多い。中にはバカな考えを起こす輩やからもいるのでな。不自由な話さ。芸術の鑑賞さえひとりではできない」ノーマンは肩をすくめた。「ところで君は、イギリスの生まれかね？」

「は……」

一瞬迷ったが、素直には答えられなかった。

「ドイツ、ハンブルグの出です。父母はイギリス人ですが」

「そうか。訛りに懐かしい響きがあったので、そうじゃないかと思ったよ。一応はイギリス人と称してもいいわけだ。まあこれから同胞のよしみで私をサポートしてくれたまえ」

差し出された手を、おそろおそろ握った。

「現代のアメリカはすっかり開拓者精神を忘れてしまっている。我々がもう一度吹き込んでやろうじゃないか」

「は。お手伝いさせていただきます」

ノーマンはうれしそうに、握手したままヘンリーの腕を叩いた。

彼が去ったあと、ヘンリーは展示室のソファに崩れるように座り込んだ。手のひらにはまだノーマンの感触が残っていた。

あの手が彼の両親を押し潰したのだ。

あの手が姉を橋の上から突き落としたのだ。

彼は両手を組み、熱くなった額に当てた。

今度は僕の手でおまえを地獄に叩き落としてやる。

彼は誓いを新たにした。

以前にも増して、ヘンリーは仕事に打ち込んだ。業績を上げれば上げるほど、ノーマンに近づくことができる。そう考えれば日曜出勤もサービス残業も進んでやった。

ライバル店を調査しては、出し抜く方策を考え、ときには相手の弱みを握って脅すようなこともやった。

そんなときは良心の痛みを感じずにはいらなかったが、決して相手を追いつめないよう、細心の注意を払うことを怠らなかった。

——僕はノーマンとは違う。でないと復讐の連鎖を生むことになる……。

どんなに固い信念があろうと、日々の暮らしの中で常に一定のテンションを保つのは難しい。自分が励めば励むほどノーマンを利するばかりではないか、いつになったら本懐を遂げることができるのか、と、そんな自問がたびたび彼を苦しめた。

美術館はそんな悩みを独り告白する場所になった。そこにはヘンリーの芸術的才能を発見してくれた姉がいるような気がしたのだ。

絵を前にしてソファに腰掛け、姉の形見であるペンダントを握っていると不思議に心が落ち着いた。父のだみ声が聞こえ、母の笑い声がこだまし、姉の作るスープの匂いがしてくるような気がした。

戦いはこれからが正念場だ。

彼は立ち上がると大きく深呼吸した。そして出口へと向かった。再び戦いの場に身を投じるために。

さらに四年が過ぎ、ヘンリーは二十九歳になった。業績はさらに積み重ねられ、グリーンウッドUSAの若手の中で最大の注目株と自他共に認める存在へと、彼はのしあがっていた。

しかしヘンリーは不満を募らせていた。一向にノーマンに近づくことができないでいる自分に。

相変わらず、美術館では二ヶ月に一度は遭遇した。

親しげに声をかけるのは決まってノーマンだった。

同じイギリス出ということもあったのだろうが、ノーマンの口調はいつも親しげだった。それだけにヘンリーは苦痛に苛まれた。^{さいな}仇と仲良く並んで絵画鑑賞をしている姿を姉が見たらいったい何と言うだろう？

ヘンリーは真剣にノーマン殺害計画を考えようとしたこともあった。もちろん場所は美術館だ。だがもし失敗したら……。ナイフや拳銃を使っても、最初の一撃でし

くじれば奴のボディガードに彼の身柄は拘束されるだろう。そうなれば復讐の機会を永遠に失ってしまう。だめだ、できない。やはり当初からの狙いどおり、社会的な抹殺計画を遂行するのみだ。決して気弱になったからそう思うんじゃない。決して――。

美術館での決行は断念した。それでも美術館巡りをやるつもりはなかった。いつかチャンスが訪れる可能性を信じて。コンマパーセントの可能性を信じて。

それはある冬の日のことだった。

抽象的なオブジェを前に、ノーマンはヘンリーの業績をほめ、気安くジョークを投げかけてきた。ヘンリーは言葉少なに応じていた。

「私の秘書は芸術を理解せんので困る。スコットランド訛りにも閉口するしな。親父の推薦なので無下^{むげ}にもできん。飛び抜けて頭脳明晰ではあるのだが……」

ノーマンはそう言うのと、いたずらっぽい顔をヘンリーに近づけ、

「じつはな、次期の秘書はぜひ君にやってもらいたいと思っている。これはジョークじゃないぞ。本心だ。ただそれにはあと三年待ってくれたまえ。三年後にはグリーンウッドグループをさらにアメリカ大陸以外にも拡張するつもりなのだ。全社を挙げて体制の見直しを行う。」

どうだ。イングラント人コンビで世界を征服してやろうじゃないか！」

ヘンリーは眩暈のする思いがした。あと三年我慢すれば、彼は文字通りノーマンの片腕になることができるのだ。そうなればいつでも彼の寝首を搔くことができる。これまでの忍耐が実を結ぶのだ。

ノーマンは呆然としているヘンリーを、秘書という高い地位を得られる喜びのあまり我を忘れていたのだと誤解し、彼の肩をポンと叩くと、美術館をあとにした。

ヘンリーはしばらくしてソファから立ち上がると、雪の降る夜の街へと出ていった。

家に帰っても今夜は容易に眠れそうもない。ひさしぶりに酒でも飲みたい気分だ。

美術館を除いて、ふだんはあまり出歩くことがないので、店の場所も善し悪しも彼にはよく判らない。とりあえず目についた地下のバーに入った。

檜の木で作られた重々しい扉を開けると、物憂い生ピアノの調べが暖かい空気に乗って流れてきた。照明を抑えた店内は程良く品の良さそうな雰囲気だったので、ひとまず安心した。カウンターに腰を下ろすと、やはり品の良さそうなバーテンにマティーニを頼んだ。

ヘンリーは酒は好きだが決して強くはない。それでも今夜は特別だと、立て続けに同じものを三杯も飲んだ。

あと三年という数字に掛けたのかもしれない。

三十二歳になる頃には、あの男の側近としてすべてを把握できる立場になる。そうすれば生かすも殺すも指一本だ。全資産の名義を自分の名前に書き換えてやろうか。それも、ひざまずく彼の頭を銃で小突きながら、あの男自身にやらせようか。一発ぐらいお見舞いしてもいいだろう。父さん母さんや姉さんの受けた苦痛に比べれば大したことじゃない。利き腕の一本もへし折ってやるのもいいな。くつくつく。

「何がそんなにおかしいんだい？」

突然、言葉をかけられ、笑いを浮かべたまま顔を上げたヘンリーは、驚きのあまり椅子から落ちそうになった。先ほどまで離れた席に座っていた禿頭の中年男がいつの間にか隣の席に腰を移していた。こちらに向けた下卑た赤ら顔の持ち主は誰だろう、ノーマンの現秘書、アラン・ベネットだった。

「いいことがあったらしいね兄さん。俺にもおすそ分けしてくれんかね」

すでにかなり飲んでいるらしく、焦点の定まらない目はいかにも気持ち良さげだ。アランはまるで酒の飲み方を知らない若者に大人のたしなみを指南しようとしてもいのように膝を寄せてきた。

どうやらヘンリーが同じ社の人間だとは気づいていな

いらしい。それもそうだ、いかに売り出し中の若き販売部長といえど大勢いる社員の中のひとりなのだ。たとえ知っていたとしても暗い店内だ。容易に判別はつくまい。

「ええ、じつは今日、上司にほめられたんですよ」

彼は当たり障りのない返事をした。

「そうかい、そりゃ良かった。君は上司に恵まれたんだな。俺なんぞ不遇なもんさ。直属の上司が社長サマでね。俺より一回り年下のキレものだ。コイツがまた絵に描いたような冷血漢でな。ヘマしないように緊張しっぱなしだ。肩が凝るったらないぜ。ハハハ」

ヘンリーは黙ってうなずいた。

「アイツの父親とは長いつきあいだな。頼まれてアイツがまだ小僧ツ子の頃から経営のイロハを叩き込んでやったのは俺なんだよ」

アランはワイングラスをぐいっと傾けた。顔がさらに赤くなる。

「あと三年って約束だが、そう簡単にこの地位を手放すもんか。魅力的な地位と収入だからな。まあ今後十年は食らいついてるつもりさ。それでスコットランドに土地を買って、悠々自適の老後を送らせてもらう計画よ」

ふーっと吐く息にさえ色が見えるようだ。しかしヘンリーはすっかり酔いが醒めてしまった。

「さてと。夜更かしはこのくらいにしておくか。あの若

造に酒臭いと文句をつけられたくないしな。じゃあ君、お先に失礼するよ。ここは私におごらせてくれ」

「……ありがとうございます」

アラン・ベネットは店を出ていった。

ヘンリーはしばらく扉を見つめていた。いや、にらんでいたというべきか。

彼は自分の計画に対する自信が揺らぐのを感じた。三年と生きていたのが十年。見えていたゴールが急速に離れて行く気がした。

自分は間違っていたのだろうか。何年もかけて奴の喉元に迫り、奴の絶頂の瞬間に息の根を止めてやろうという考え方は悠長すぎたのだろうか。

彼は腰を上げた。このまま飲み続けても悪酔いするだけだろう。それなら早く帰って眠る方がいい。

外に出ると、雪はかなり激しくなっていた。今夜は積もりそうだ。

足を自宅のあるアパートメントの方に向けると、前を歩いていくアランの姿が目に入った。右に左にとふらふら揺れて、あぶなっかしいことこの上ない。

そのとき一ブロック先の角を、猛スピードで突っ込んできた車があった。四、五人の若者が乗っており、大きなボリウムで音楽を鳴らしている。

車は速度をゆるめずに近づいてくる。こんな雪の日、

道路の状況は劣悪なお構いなしだ。

眉をひそめて見ていると、前方を歩いていたアランの足がもつれ、道路の方へと倒れかかった。間の悪いことに暴走車の後輪がスリップして、アランに接近した。

一瞬だった。

ドンという音と共に、アランの体が宙を舞った。

車はゴミバケツをいくつも跳ね飛ばすと、道路の端にようやく停まった。

ヘンリーはまばたきもせず立ちすくんでいた。

車はすぐに発進した。そして猛加速すると、横道に消えていった。

あたりは静かになった。ヘンリーは凍り付いたように歩道にへばりついた足を前に出し、小走りでアランに近づいた。

「うう……」

ビルにもたれたまま目を閉じているアランの鼻腔から血がしたたり落ちていた。頭を打ったのかもしれない。早く救急車を呼ばないと。

呼ばないと――。

左右に目を走らせる。他に人影はなかった。

ヘンリーはアランの背後にまわり、自分の腕を相手の腋の下に通すと、その重い体を後ろへと引きずった。そのままビルの隙間のせまい路地に引き入れると、壁に静

かにもたせかけた。

アランは荒い息を吐いていたが、意識はないようだ。

ヘンリーはアランを置いたまま通りに出た。心臓の鼓動がこれ以上ないほど速く打ち震えていた。

振り返ると、アランの全身はビルの影に隠れて見えな
い。

ヘンリーは歩き出した。決して走ってはいけない。

——だって雪道の上を走ると滑るじゃないか。

——僕まで転んだら、ベネットさんに救急車を呼ぶことができなくなる。

少し行ったところに公衆電話があつた。彼はそのまま
素通りした。

——この電話はきつと壊れてる。壊れてるはずだ。

さらに歩を進めると大きな通りに出た。どうやらミッドタウンウエストの東の端まで歩いてきたようだ。人通りもある。彼は屈むと両膝に手をつけて呼吸を整えた。いつの間にか競歩並みのスピードで歩いていたのだ。

彼のすぐ目の前をNYPDと書かれた車が通りすぎた。
ニューヨーク市警察だ。

——知らせなければ。知らせなければ。

彼はパトカーを見送った。

雪はしんと降り続ける。彼は自宅のあるグリニッチ・ビレッジ目指してゆつくりと歩き始めた。いつの間

にか彼は鼻歌を歌い始めた。

鼻歌は、自宅に着くまで途切れることはなかった。

アラン・ベネットの遺体は、翌日の昼頃になつて発見された。警察の発表によると、死因は車に撥ねられたことによる内臓破裂。すぐに搬送されていれば助かる可能性があつたが、零下五度の中に一晩放置されたことで凍死したともいえる。

警察は轢き逃げ車を捜している。どうやら車に乗つていた連中が人目につかないようにアランを引きずつて路地に隠したのだと疑われているらしい。発見が遅れるよう、手前にゴミバケツを並べる念の入れようだ。

ヘンリーは気が気ではなかった。

そういえば、無意識のうちにゴミバケツを動かしたような気がする。さいわい、手袋をしていたのでどこにも指紋は残らなかつたろうし、未明まで降り続けた雪が足跡も含めて、すべてを真つ白に消してくれた。

しかしヘンリーの心中まで真つ白とは言えなかった。

“アランを見殺しにした”。

“お前は自分の目的のために、アランを見殺しにしたのだ”。

囁きが耳について離れなかった。

ノーマンはNYPDに対して、全力を挙げての捜査を

求めた。アランはノーマンの腹心の部下であり、警察としても、今をときめくVIPの片腕を殺害した犯人を挙げなければメンツにかかわると、全署をあげて搜索に奔走した。だが犯人は一向に尻尾をつかませなかった。

アランの葬儀が行われた翌日、ヘンリーは、ノーマンから社長室へ来るようにと呼び出された。

緊張の面もちで社長の前に立った販売部長は「このたびは誠に……」と悔やみの言葉を述べかけたが、ノーマンが手を挙げて制止した。

「葬儀は終わったのだ。あとは警察の仕事だ。もう忘れるよう」

「は……」

ノーマンは立ち上がって窓辺に寄り、ガラス越しに朝日を浴びる摩天楼を遠望した。

「君は私の話を覚えているかい？」

「……」

「私は約束を守る男だ。ようこそ、ハンス・マグワイア君、今日から君が私の片腕だ」

「——ありがとうございます」

ヘンリーは表情を隠すように深々と頭を下げた。

「警察は公にしていらないが、アランはどうやら酩酊状態にあったようだ。日頃から過ぎる傾向があったからな。」

私も再三注意していたのだが……。おっと、忘れようと言っておきながら愚痴っぽいことを。私らしくもない。その点、君はあまり飲まないらしいな。いいことだ。私と君は芸術を愛^めでながら、心で酒を飲める人間だ。

今後のさらなる活躍を期待しているぞ、ハンス君」

「ご期待に添えるよう、がんばります」

社長室を後にしたヘンリーは、エレベータには乗らず、階段を一段ずつ歩いて、屋上に上がった。

エンパイア・ステートビルが見える。

双子の貿易センタービルも朝日を浴びて光っている。

ついにここまで来た。

ロンドンの下町の、瓦礫の下から。

ニューヨークの頂上に肉迫する場所にまで。

あと三年のはずが、いきなりの今日。

感慨もひとしおのはずだった。だが今の彼には喜びがまったく湧いてこない。

年月があの日への悔しさを風化させたともいうのか。

目を閉じて、風の音に耳を澄ました。

瞼の裏に、下町の情景が浮かんできた。

無愛想だが、温かいまなざしの父。

面倒見がよく、常にいたわりを忘れない母。

よく本を読んで聞かせてくれ、彼の才能を見抜いてく

れた姉。

本当ならば今頃は画家かイラストレータとして成功した自分は、ロンドンの郊外に居を構え、両親を引き取って住ませ、土日には結婚した姉夫婦を呼んで庭でバーベキューパーティーを開いたりして、楽しく過ごしていたはずなのだ。そんな人生を送っていたはずなのだ。

マクファアソン家から幸福を奪い、父母と姉を殺した人間、いやはつきり“殺人犯”と呼ぼう、それがにつききノーマン・グリーンウッドなのだ。

奴のやり方の冷酷ぶりは、このニューヨークでも遺憾なく発揮されている。

吸収合併の際に断行された大型リストラでは多数の人間が涙を飲んだ。中には頸をくくった者もいるという。

目標ノルマの達成、実力主義といえは聞こえはいいが、ノイローゼに陥り、辞めざるをえなかった人間も少なくない。

ライバルに対しては、さらに苛烈を極める。

大金をはたいて人材を引き抜く。なびかない人間に対しては、デマや中傷を故意に流して潰してしまう。中には失踪したまま行方知れずというケースもあるという。おそらくは父さん母さんのように消されたのだろう。

ノーマンの歩いた跡には一本の草も残らない。まさに死屍累々である。なのにそれが表に出ることはない。マ

スコミ対策が万全なのである。

ノーマンはイギリスの頃から、マスコミを重要視していた。プレスの使い方が実にうまいというべきか。悪い話が新聞紙面をにぎわすことは皆無だった。一度だけタブロイド誌に噂としてよからぬ事が書かれたが、翌日には書いた記者が解雇されたという。

鉄壁のグリーンウッドUSA。今や一人勝ちの状況である。

だが、こんなことが許されていいわけではない。

他人の不幸の上に成り立つ繁栄なぞ、まやかしである。ヘンリーは目を開いた。

彼の目には林立する高層ビル群がまるで墓石に見えた。グリーンウッド霊園。

だがその一つは、アラン・ベネットの墓。

ヘンリーは首を振った。殺したのは自分じゃない。乱暴な運転で夜の街を駆け抜けた若者たちである。

だが自分もその片棒を担いだのではないのか？秘書の地位を得るために見殺しにしたのでは？

違う、違う、違う！

私は何もしていない。何のかかわりもない！

「うおーっ」

咆吼がビルに飲み込まれる。

彼は姉の形見であるペンダントを力いっぱい握った。

僕は飲まれないぞ。飲まれてたまるか。

「秘書となったからには、私のプライベートも把握してもらわないとならん。じつは三ヶ月後、私は結婚する」

「本当ですか？」

ノーマンは苦笑した。

「おかしいか？ 私が家庭を持つというのが」

「いえ」

「おかしい……というより、イメージに合わん」とでも言いたげだな。フフフ」

ノーマンは含み笑いをかみ殺しながら、ヘンリーの前に一葉の写真を放ってよこした。

そこには見目麗しい女性のバストショットが写っていた。

「美しい方ですね。どこで知り合われたんですか？」

ノーマンは今度は、ハハハと声を出して笑った。

「君が女性に興味のない朴念仁という噂は本当なんだな。

その女性を知らないニューヨークはモグリだよ」

今度はForbes誌の先月号が出てきた。開かれたページでは一人の男が特集紹介されていた。

「うちの一番の取引銀行の頭取さんじゃないですか」

「彼じゃないよ。右下の家族写真だ」

問題の女性は、彼の横に立っていた。

「彼の自慢の一人娘。彼女がフィアンセというわけさ」
ヘンリーは鼻白んだ。まるきり政略結婚じゃないか。
「別に君にデートの手配を頼もうというのではない。ただ私たちの交際はまだ極秘だから、君にも知っておいてもらわねばならんことも多いのだ。よろしく頼むぞ」

秘書室は社長室の隣にあり、ヘンリーは常時ノーマンに張り付いて、彼が行くところどこにでも同行した。

同行する人間は他にもいた。二人のボディガードである。いかつい体を黒いスーツに包んだ二人は、イギリス時代からずっとノーマンに付き従っている。巨体の持ち主はフランク、頭二つ小さい方はティムと呼ばれている。二人とも無口で、ヘンリーは何度か声をかけてみたのだが、ひと言の返事も返ってこなかった。

「どちらも生まれつき口が利けないんだ。だからこそ選んだとも言える。君も知っているように俺には敵が多い。まだイギリスの駆け出しの頃、彼らに何度命を救われたことか。二人とも俺のためには躊躇なく体を張る。信頼できる数少ない部下だ」

ノーマンはそう言った。

仕事内容が劇的に変わったため、ヘンリーは新たに覚えることが増えた。つきあう人間も様変わりし、日々仕

事に忙殺された。

グリーンウッドグループの中枢に入ることではできた。ここまでいい。しかし知れば知るほどその揺るぎない仕組み、鉄壁の体制に圧倒されるばかりだった。どこをどう攻めれば突き崩せるのか。

ヘンリーは改めて、グリーンウッド帝国の怪物のような強大さに目が眩む思いがした。

そうこうしているうち、またたくまに三ヶ月が経過し、ノーマンの結婚式の日がやってきた。

会場のセント・パトリック教会は朝から一目見ようとする人の波でこった返し、大聖堂の中も荘厳な雰囲気の内、熱気がむんむんと充満していた。

新郎はイギリスの「貴公子」であり、流通業界をリードするニューヒーロー、ノーマン・グリーンウッド。そして新婦は米国でも有数の銀行頭取にして大富豪ジョン・クインの一人娘エレノア・クイン。

まだ二十三歳という若いエレノアに、以前ヘンリーは訊ねたことがある。あなたにとってノーマンはどんな人間に映っているのか。

「優しい人よ。ときどき底の知れない眼をすることがあるけど」

——あなたはあの男の真の姿を知らなくていいのか？

——本当に彼でいいのか？

式は厳粛に進行し、指輪の交換の段になった。

見つめ合うノーマンとエレノア。

見守る招待客たちと報道陣のカメラの砲列。

その中に混じって、ヘンリーも柱の陰から祭壇の上を見つめていた。

周囲に漂う高揚感に比べて、彼の心は沈んでいた。

ロンドンを着の身着のまままで逃げ出してから十一年。

彼を追うようにニューヨークへやってきたノーマン。

虎視眈々と復讐のチャンスを狙いつづけた自分。

ノーマンは強力な肉親をもつ美しき伴侶を得ようとしている。そのうちに子供が生まれるだろう。そうなることから復讐を遂げれば、悲しむ人間がいたずらに増えることにならないか？

自分が不幸のどん底に突き落としたいと願っているのはノーマンだけだ。彼の妻子は関係ない。

これまでの自分は悠長過ぎた。

復讐するならば、今すぐにも実行しなければ。

ヘンリーは右手の人差し指と親指を銃に見立てて、祭壇のノーマンに照準を合わせた。そして小さな声で「バン」とささやいた。

B A N G。

純白のウエディングドレスを着飾った花嫁の体が、バネ仕掛けの人形のように反り返った。

参列者の目には、空中にパツと薔薇の花が咲いたかに見えた。

ノーマンは咲きこぼれた花びらを全身に浴びた。

参列者が、それは花びらなどではなく鮮血だと気づくまでに数秒の間があった。

花嫁は祭壇に敷かれた純白の絨毯の上に仰向けに倒れた。

あわてて駆け寄ろうとするノーマン。

そのとき二発目の銃声が轟いた。

今度はノーマンの体が独楽のように回転した。そして花嫁の上に、覆い被さるように倒れた。

聖堂の中は蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。

花嫁と花婿は、明らかに何者かによって撃たれたのだ。警備にあたっていた警官たちが口々に何か叫びながら入ってきたので、騒ぎはさらに増幅した。

ヘンリーは倒れたままのノーマンに駆け寄った。もちろんすでに二人の黒服、フランクとティムもノーマンのそばにひざまずいていた。

「エレノア、エレノア」

背中に銃弾を受けたノーマンは、あふれ出る血を止め

ようとするフランクの手を振りほどき、倒れたままのエ
レノアに近づこうとした。

だが花嫁がすでにこの世の人でないことは、確かめる
までもなかった。ノーマンは花嫁の白い顔を両手で持ち
上げると、自分の胸の中に抱きすくめた。

ヘンリーは振り返った。そして立ち上がるとバージン
ロードの上を走り出した。

二人を撃ったのは誰だ？ 想いが形になるとしたら、
犯人は自分だったかもしれない。でも自分なら花嫁まで
狙ったりはしない。

聖堂の反対側では、狂乱の嵐が渦巻いていた。我がち
に逃げようとする参列者たちは、日頃の品格もマナーも
かなぐり捨てて入口に殺到していた。

警官隊は階段に向かっている。犯人は西側の尖塔に逃
げ込んだらしい。ヘンリーも後を追って階段を上った。

「降りてきたまえ！ もはや逃げ道はない！」

警部と思しき五十がらみの指揮官が、上方に向かって
大声で呼びかけている。すると、それを待っていたよう
に早口の男の声が返ってきた。

「撃つな、撃つな！ 降りていくから撃つな！」

警部は周囲の警官隊に目配せした。

「ようし、撃たないから、ゆっくり降りてこい」

「降りていく。その前にひとこと言いたい！」

犯人は姿を見せないまま、言葉を続けた。

「俺の妻と子はな、ノーマン・グリーンウッドに殺されたんだ。――俺の家はグラントセントラル駅の裏で代々レストランを営んできた。駅員に『ブレッドの店』って聞いてみな。誰でも知ってる。――そんな俺の店をグリーンウッドの奴あ、立ち退けて迫ってきやがったんだ。それもあくどいやり方でな、チクショウ。俺のご先祖様があの場所に店を構えたのは不法行為だったと言いがかりをつけやがった。おとなしく土地を明け渡さねえと不愉快な目で見ると脅しやがったんだ！」

警部がトランシーバーに向かって何やら話している。

「――その日から嫌がらせの連続だ。それだけなら我慢のしようもあった。奴らはな、俺の妻を轢き殺しやがったんだ！ 逃げていく車を見た人間はいつぱいいたさ。でも犯人が挙げられないってどういうこった？ おまけに今度は息子がハドソン川に浮かんだ。体ん中からドラッグが検出された？ そんなわけはねえ！ あいつはそういうの一番嫌ってたんだぜ！ おかしな話ばかりだ。あるとき俺の仲間が教えてくれたんだ。息子を拉致した奴はグリーンウッドの手下だってな。それでようやく合点がいったってわけだ。」

あいつは、ノーマン・グリーンウッドは人殺しだ！

ならば俺が仇を討とうが文句を言われる筋合いは――」

ビシツという音がして、犯人の独白が途切れた。
警官隊が警部の合図で駆け上がっていく。

向かいのビルからS W A Tによつて狙撃されたのだ。
それが駅の名物男フレッド・モースの最期だった。

ノーマン・グリーンウッドは一命を取りとめた。しかし全治三ヶ月と診断され、入院を余儀なくされた。

ヘンリーは取締役会と病院のあいだを、日に何度も往復するはめになった。グリーンウッドには何人もの重役たちがいたが、あくまで形式上で、実質はノーマンの独裁企業である。ノーマンが判断し、命令を下さねば、グリーンウッドグループはすぐにも立ち行かなくなる。

長い手術を終え、面会謝絶の札が取り払われて初めてヘンリーが病室を訪ねたときに、ノーマンが発したのは、「エレノアはどうなった？」

であった。即死であったことを告げると、ノーマンはしばらく黙祷するように目を閉じていた。

「犯人について、お聞きになりたいですか？」

いずれ誰かが伝えるだろうが、ヘンリーとしてはノーマンの反応が知りたかった。

「うむ。教えてくれ」

ヘンリーが話しているあいだ、ノーマンは眉一筋動かさなかった。看護師が活けたのだろう花瓶の花を見つめ

たまま、ひとことも口をはさまなかった。

ヘンリーは疑問点をたださずにはいられなかった。

「犯人がしゃべったことは、本当なのでしょうか？」

ノーマンはようやく眉を開いた。

「聞いてどうする？」

「いいえ……」

「よけいなことは訊ねなくていい。それよりもエレノアの葬式への代理出席、よろしく頼むぞ」

「はい」

病室の外では、数人の警官が廊下に等間隔で立っていた。フレッド以外にも、この機会にノーマンの息の根を止めようと狙う人間がいるのかもしれない。この厳重な警戒を見れば、警察が裏情報をつかんでいるのは明白だ。病室の前で、フランクとティムを姿を見かけたのが、何やらホッとさせられた。

ヘンリーは久しぶりに美術館のソファに腰をおろしていた。視線は展示されている絵を通り越して、セント・パトリック教会のそびえ立つ櫓を見上げていた。

フレッド・モース。彼はヘンリーの分身だった。

彼と自分の立場が入れ替わっていてもおかしくない。

自分がやろうとしていたことを彼は先んじてやっただけなのだ。

おそらく事前に綿密な計画を立てたことだろう。ノーマンの結婚式の日をあえて選び、厳重な警戒の目をかいぐぐって、武器を持ったまま侵入し、ノーマンに照準をつけて、ためらうことなく引き金を引いたのだ。

その決断力と行動力には、ただただ舌を巻くばかりだ。だがその顛末は……側頭部を撃ち抜かれての死。

脳裏にはまだ、血の海の中に両眼を開いたまま倒れているフレッドの白い顔が焼きついていていた。

結局、フレッドのいまわの際の言葉が公表されることなく、彼は一介の狂人として闇に葬られた。

彼の銃弾はノーマンの命を奪うまでには至らなかったわけだから、フレッドの魂は痛恨の思いを抱いたまま、まだこのマンハッタンをうろついているかもしれない。果たして、自分ならばもつとうまくできただろうか。

判らない。

——チャンスがうかがうなどと言い訳しながら、自分が今日まで行動を起こさなかったのは、臆病だから？

そうだよ、そのとおりだ。

死ぬのが怖い。フレッドのように、警官隊に囲まれた自分を想像すると、全身に悪寒が走るのをどうすることもできない。

——ええい！ つまらんことを。

彼はソファから立ち上がった。

過去を振り返ってもしかたがない。要はこれからどうするかだ。せつかくフレッドがその身を犠牲にしてノーマンに傷を負わせてくれたのだ。これをチャンスと思つて、今こそ手を打つのだ。今こそ復讐の狼煙^{のろし}を上げるのだ。

ところが――。

三日後、ノーマンが病室から姿を消した。

重体の身で、自由に歩くこともできないはずなのに。

マスコミは警察の手抜きを散々に非難した。

しかしあまりに見事な消え方に、警察もマスコミも首を傾げた。手を貸した者がいるのは疑いようがなかった。ノーマンの失踪と共に、フランクとティムもその姿をくらました。

その後、ノーマンの行方は杳として知れなかった。五年の月日が経つまでは。

〈後編につづく〉